

親戚の年回の席で、シベリア抑留の話となった。

奥田氏は、少年満蒙開拓団員として国策に沿って緑の大地を夢見て渡満した。そうして入隊、シベリア抑留と労苦と重ねた人である。昨年、「シベリア抑留の労苦を語り継ぐ集い」で再会し、協会に加入され手記をお願いした。

この手記は、奥田氏が青春時代の苦しみを後世に残したいと記録されたそのままである。

(三重県 森 勇生)

## シベリア抑留記

三重県 廣田吉生

はじめに

戦争、それは人間同士が命を奪い合う鬼畜にも等しい残虐非道の行為です。その終結は敗戦でした。

捕虜の身となり、異国の地で祖国日本の安泰と、肉親家族の無事を念願しつつも、極限の苦難に堪え抜いた幾多の試練は、五十余年を過ぎた現在も私の脳裏から離れません。

戦争の恐ろしさを後世に伝える事が、生き残った者の義務と考えまして書き綴りましたが、文章を書くことは全くの素人です。その上に誤字もあり内容は至って拙文ですが、なにとぞご判読下されば幸甚です。

昭和二十年八月〜二十二年十月までの抑留

一、なぜシベリアに抑留をされたのか

日本は昭和十二(一九三七)年七月七日より、中

国(支那)と戦争を始めました。中国の全土

に戦争は広がり大きな戦争となり、満州国(中国の北部地方)にも日本の軍隊が約百万人、農業開拓団約六十万人が駐屯していました。昭和二十年一月、沖縄を侵略中のアメリカ艦隊に対して、満州から特別攻撃飛行隊が連日飛び立って、アメリカの艦隊に体当たりして爆発させて、沈没させる壮烈な戦闘が続けられました(特攻隊の飛行機には、往きのガソリンだけで帰りの燃料は無く、その分を余計に爆弾を積み込んでいました)。私も特攻隊の一員で、烈しい訓練を繰り返しながら出陣するその日に備えて、待機させられていました。日本の本土も二十年三月頃から東京を初め大阪、名古屋、神戸の大都市、中市に無差別爆撃が行われて、八月六日には広島市に原子爆弾が投下されて、多数の死傷者が出ました。

このように日本が一番弱く弱りきっていた八月九日、ソビエト、今のロシアは日本に対して宣言を布告して、黒龍江(満州との国境)を越えて

戦車を主体とするソビエト軍が押し寄せて、無防備の開拓団部落、農場を荒らし回って、その勢いで国境のチチハル、ハルピンを荒らして、新京(長春)、奉天(瀋陽)に数百万人の軍隊が押し寄せて来ました。その軍隊は囚人を主体とする命知らずで無法者の軍隊でした。日本軍は出来る限りの軍隊が応戦をしましたが、兵器が不足していて戦闘の繰返しがあまり無く、むしろ国境の付近に避難している日本人家族を安全な後方の町へ護衛するための矢面に立っていました。

八月十五日に終戦となり、アメリカ、イギリス、中国、フランス、ソビエトに対して無条件降伏となり、日本は三百万人の戦死者と戦傷者数十万人の犠牲者及び廃墟と化した国土が残りました。

海外に残された、満州に残された私達日本軍はわずかに七日間のソビエトとの戦争でしたが、捕虜として軍人、警察官、開拓団、駅員等の男子がソビエト軍に拉致されて、シベリアの地へ送り込まれました。

## 二、抑留生活の状況

十月三十日、国境を流れる黒龍江（川の幅約二百メートル）に到着しました。気温はマイナス五度で、雪が膝まで積もり、冬になっていましたが、夏の服装のままを着替えをする服も無く、一枚の毛布を頭から被って、寒風に吹かれて野原で一夜を過しました。二カ月前までは四季の変化に応じた生活と服装を整えていましたが、日本軍人の今の姿に愕然としました。行く先は全く不明のまま数日を過しました。それは千五百人の集団が出来るまででありました。出発の合図が出て、大きな貨物列車に八十人ずつが乗り込みました。「日本へ帰れる」……とお互い同士が励まし合って列車の発車を楽しみました。

日本では一番大きな貨物は三十トン積みですが、それは百五十〜百八十トン積みの貨物列車でした。十八両を繋いだ長い列車でした。シベリア鉄道は山もない広い広い平原を真っ直ぐに伸びた線路上を走るために、大型の貨物で長い列車で走ること

が出来ることを知りました。

「日本へ帰れる」という話を信じて、それぞれが車両の大きな振動の中を毛布にくるまってお国自慢に花が咲き、果ては自慢の料理の話で約七日間を走り続けました。しかし列車は西へ西へと進み続けて、日本の方向とは反対に進んでいました。

貨車のためにわずかに開けた隙間から見た外の景色は、荒れた野原と森林と、夕日が進行方向に見える景色でした。誰言うもなく「日本へ帰れる」の話は「デマであつたのか」……「いや、日本へ帰れる」……の話が交差して、不安に包まれていました。たしか八日目の朝、見渡す限り雪に閉ざされた野原の真ん中で「下車せよ」の指令が出された。その通りに行動をして、気温はマイナス二五度と知らされた。雪は固く足を踏み入れると膝の上まであり、風は唸りながら吹き荒れていました。千五百人は、ソビエト軍兵士が自動小銃を構えて「ブッシュ（急げ）」「ブッシュ」の怒声の中を歩き続けて、ようやく目的の古い木造の倉庫に入り

ました。早速に休みやすい場所造りをと、古い丸太と板を集めて、三段に仕切った宿舍を組み立てました。窓が無く昼間も暗く、板囲いの隙間から入る光を頼りに、時計も電気も無い生活が始まりました。夜眠る時は、大きな隙間から入り込む雪の明りを頼りに、冷たい風が吹き込む寒い中、一人一枚の毛布を、一枚を二人が下に敷き、二人一組で一枚の毛布を頭から身体全体を包み、震えながら眠りましたが、寒さと床板で痛さを堪えるため、十分な眠りが出来ず、睡眠不足のまま「起床せよ」の大声で目を覚ますと、室内全体が真っ白く雪が積もったように見えました。それは全員が毛布を被って眠つたために、吐く息が毛布の外で冷されて、凍結して白い雪のようになっていたのです。屋外に出ても夜のままで暗く、午前七時でも夜でした。（註）冬期は太陽が南へ寄るために、夜明けは十時頃になります。夏は逆に太陽が北へ寄るために、午前零時を過ぎても未だ明るく、はるか北極方面の空はいつまでも明るく、白夜です。

夜明け前の一番気温が低い時に、五列縦隊に並んで人員点呼が行われましたが、ソビエト兵は一列二列と数えて行く途中で数を間違えては、元に戻って数え直すことの繰返しで、一時間以上は掛りました。その上、屋内に残っている人数を調べることが同時に行われましたが、暗い室内を手で探りながらの状態で、時には銃で突きながら、負傷者、病気で寝ている人、または息が絶えている人の数を集計する事に甲高い声を張り上げて、十人余りのソビエト兵士がわめき合いながら、お互いの間違いを言い争いながらの数合わせで、その間の待ち時間を凍結した雪の上を足踏みしながら、「人員点呼は、こちらに任したら簡単に出来るぞ」……と仲間同士で話し合いました。

栄養失調が原因で、凍死者は多い時は十人になることもありました。ようやくにして人員数が掌握されると解散となり、東方が少し明るくなり始めた九時頃になると「出発だ」「ダモイだ」のソ連兵士の罵声に急かされて、簡単な朝食を済まして、

昼食も茶碗一杯の高梁の雑炊と一握りの黒パンを持って、五十人が一集団となり数キロ離れた原始林の生い茂った密林（えぞ松）で、太さ五十センチ、高さ二十センチメートルを二人が一組になり、大きな鋸で伐採を行いました。ノルマ（仕事量）はソビエト人の平均伐採数が基準となり、それで私達の成績も決められました。凍りついた硬い木々を、体力が弱くなっている上に伐採の経験も無く、大きな鋸を使うこともほとんどの人が初体験の事で、私達日本人には到底及ばない仕事でした。暗くなるまで八時間働いて、二〇パーセントの成績がやつのことでした。その日の成績で翌日の食事が決まるため最低量（質）が続きました。

ソビエト憲法で「働かざる者は食うべからず」「ノルマは必ず達成せよ」……と定められて、それを実行する事が国民の務めであることを強制させられました。一日八時間労働は鉄則でした。私達抑留者にはどこからも救いの手は無く、もちろん

かけて運搬してきた、太さ八十センチ、長さ二十メートルをトラックから降ろして、貨物列車の引込線へ十五人が一組となって積込み場まで運び、貨車積みが出来る高さまで七、八段を積み並びました。広大な野原が原木の山で埋め尽くされました。貨物列車は二日ごとに一日二、三回入る状況でした。積込み作業は、機械は何も無しですべて人力で行う重労働でした。その上貨物車は超大型で、百五十〜百八十トン積みの無蓋車でした。三十人が一組になり、二十〜二十五両の列車に積込みを行い、やっと終了して暗い夜道を収容所に帰り着き、眠りに入って間もなく、次の「貨物列車が入った」との連絡で起こされて、また数キロ離れた積込み場へ行き、五、六時間かけて積込み作業を終ると夜が明けて、翌日の作業として続けられました。最も苦労したのは雨の時季でした。幾日も雨が降り続いて、合羽、着替えも無く、ズブ濡れのまま、体温で乾かしながらの日でした。材木の上に乗ると何度も何度も滑りな

んのこと生命の保障も無く、死亡者が続出してもソ連側は当然のごとく捕虜としての扱いで、知らぬ態度でした。

従って日本人だけで、出来るだけの手を尽くして埋葬しました。この犠牲者は最初の一年間で最も多く続出した。それは①日本の国が戦争に敗れた事。この衝撃は一番心にズシリと応えました。②連日過激な重労働が続き、疲労の回復は全く出ず、蓄積するばかりでした。③いつ日本へ帰れるのか？その約束も無く、生きる希望が全く失われて、夢遊病者の状態に変化してきた姿は、数カ月前まで、凛々しい日本帝国軍人としての態度で勇敢に戦闘を続けた軍人のあまりにも激変した姿に、現実ではないと思えました。比率では、例えば十人の内、三人は死亡、三人は負傷者（障害者）、四人が健康者という状況でした。

#### 〔夏期の作業〕

冬の間、深い深い山奥の森林地帯で伐採した原木を大型トラック（アメリカ製）で、十数時間を

がら、捻挫、打撲の繰返しで、骨折の負傷者が続出していた。人員が減少すれば一人当りの作業量は増すばかりで、三十人が二十人になり、十五人が一組となる状態でした。ソ連側より「この積込み作業が終了する秋頃になれば日本へ帰れる」……という話を何よりも頼りに歯を食いしばりながら、お互い同士が励まし合って、その日が来ることを楽しみに待ちましたが、秋も過ぎ冬になっても「日本へ帰ること」は実現せずに落胆が続き、またも恐ろしい冬を迎えました。抑留二年目の冬となり、またも深い深い山奥に入り、零下二五〜三〇度の極寒の森林地帯で（北極に近く、人間が来たことなし）伐採の作業に従事しましたが、抑留生活が一年余りを過ぎて、当初の千五百人が、死亡者、重傷者の続出で千人を割る人数にまで減少していました。同僚同士がお互いに不安を隠しきれず、明日は我が身か……と暗い思いが胸を強く打ちました。

#### 〔冬期は〕

十月になると零下一〇度になり、連日空はどんよりとした灰色の雲で覆われて、雪が降り続いて、北極からの強い風が吹き荒れて、十一月に入ると更に気温が低下してマイナス一五度〜二五度になります。全く太陽は見えず日射しが無く、気温は下がるばかりです。空は灰色、地面は深い雪に閉ざされて、山と野原の境界が無く、殺伐とした死の世界です。零下二五度以下になると雪は降らず、風も弱くなり、空気全体が凍り付いた壁のようになり、見渡す限りの雪原も固く凍った石のようになります。地面に穴を掘る時は、雪を割って取り除くのに苦労でした。地面は上が固く凍ってコンクリート状になり、固く固くなっています。長く重い鉄棒で突きながら、少しずつ土を割るようにして穴掘りをしました。

#### 〔夏期は〕

真夏の七、八月頃は、雪は溶けてありません。野原には雑草が繁ります。道端に「アカザ」をよく見かけますと、我先にと走り寄って、むしり取

りました。私達には唯一の栄養源(ビタミン)でした。作業場へ行く途中のことで、列を乱して走るため、警備のソ連兵士は大きな声で「元に戻れ」……と、銃を構えて来ました。この頃は地面は二十センチも掘ると凍っていて、五十〜六十センチも掘るには大変な苦労でした。

#### 〔冬期の続き〕

二年目の冬になる頃、旧日本軍の防寒シャツ(毛糸編の上下)と、毛皮のシューパー(犬、羊の毛皮製)、充分な仕上げがされていない硬い物でしたが、防寒には役立ちました。

真冬はすべての物が凍結しています。特に鉄類は凍っているために、不用意に素手で触ると手が吸い付かれて、手の皮が剥ぎ取られることになります。

#### 〔食事〕

食生活は最も大切な生命の源です。抑留当初はソ連側も百万人以上の人間を受入れる体制が無く、特にシベリア地方の未開発地帯では、原始的な生

活環境でした。スターリンの鉄のカーテンで仕切られた独裁的な共産主義政策は、外国人はソ連領土内への立ち入り禁止(外交関係は除く)、ソ連人は外国へ行く事は厳禁(外交関係は除く)。従って一般の国民には諸外国の在り方、地理等は知らされず、世界中にはソ連、アメリカだけと考えられた。今度初めて日本の存在を知り、一般的には「東京」「東京」と話題にされていた。

食事は一日三食でしたが、主食は黒パンでした。脱穀されていない馬糧高粱と岩塩を水で溶き、じやがいものイースト菌で作った四角いパン素地を、土と煉瓦にて築いた窯で焼き上げた団子状のパン三〇〇グラムが一食分でした。燕麦に変えられて来ました。

昭和二十年初め頃のソ連は、三年続きのドイツとの戦争で、西欧側のウクライナ地方は食糧の生産地帯が早魃続きで不作の上に、食糧貯蔵倉庫はドイツ軍の爆撃で全壊となり食糧不足の上に、シベリア地帯は寒冷地のためにせいぜいキャベツ、

じやがいもの生産ですが、長期の雨季が続いて収穫はほとんど無く、食事のスープも肉類、野菜も無くなり「スープの素は、机の引出等の接着剤、ニカワを剥いで凌いだのに」「日本は満州に食糧が充分にあり、野菜もよく獲れていたのに、なぜ戦争に負けたのか」……とソ連国民は不思議に思っていました。

#### 〔肺浸潤で生死の淵を彷徨〕

昭和二十二年一月頃のことです。作業から帰ると「米搗き当番」を言われました。(この当番は作業から帰った後に三日間、四時間行います)米の脱穀を足踏みしながら、約三メートルの杵を踏んで行いますが、米も凍結しているために常温で行う場合の数倍はかかりました。米搗き小屋は板で囲われた物置小屋でした。雪にスッポリと包まれて、内側は作業者二人が吐く息が天井に当り凍り付き、冬の長期間、幾人かの吐く息と糠埃が重なって、天井、柱、壁にまで厚い氷壁となり、冷凍庫の中で作業を行っていました。もちろん暖房の設備は

無しです。杵を踏む全身活動で汗をかき、そのままで屋外に出たり入ったりしていましたので風邪をひいたのですが、幾日も発熱していても倒れるまでは作業を休むことは出来ませんでした。かなりの高熱になり起き上がる事も不能になった時、日本人の旧医師の人が体調を診て「肺浸潤」で体温も四二度近くありますとの診察で、ソ連側に伝え、作業を休む許可を得ました。薬も何も無く横になり寝ているだけでした。飢えに飢えていたのに食欲は全く無く、水が無性に飲みたくても水を渡してくれる人もいない。ひたすらに水を脳裏に描き続けていました。部屋の隅に樽に入った消防用水があることを前から知っていました。水は長い間取り替えることもなく、汚れは酷くなっていました。夜間になり人がいない時に起き上がってフラフラの体でしたが、水の樽に近寄り水を手ですくって満足するまで飲みましたが体調は更に悪化して、体温も更に上がる傾向となりました。もう命はあまり持たない……と思われていました

り、助かると思いました。病室内へ入るには「シャワーせよ」との命令で、シャワー室は水と同様の温水を頭からかけられて放心から正常に戻されましたが、もう身体はヨレヨレの状態で、生死の間を彷徨していました。診察室の受付前で待つ間、大きな咳が連続で止まることなく苦しみ抜いている様子を見ていた看護婦が、私の右の胸にカンフル注射を打ってくれたので、しばらくすると咳が止まり平静に戻り我に返りました。病室に移されて看護を受けましたが、人種差別のない国であり、また日本人は私一人のため珍しそうに近寄って慰めてくれました。春が過ぎる頃になり健康体を取り戻したので退院となり、収容所へ帰りました。捕虜の身でありながら陸軍病院に入院が出来て、命を救われた破格の取り扱いを受けることが出来た幸運は忘れる事が出来ません。

「日本へ帰れる」……デマ

「日本へ帰れる」……この情報はソ連側から二度三度と出されましたが、いずれもデマでした。

が……日本に帰るまでは死ねない!!と心の中で叫び続けていました。

この時期に今までにない事が起きました。それはソ連政府が各所の収容所を調査することになり、役人が私達の病室に入り、私を見て「この人は酷い病人のようだから病院へ移しなさい」と収容所長に命令しました。今までにない事で、私は「助かった」と心の中で叫びました。早速に入院することになり、トラックの荷物台にまるで丸太棒を運ぶようにゴロゴロと乗せられました。トラックは凍りついた凸凹の大きい雪原を走り出して、振動と大きな揺れで、荷台に置かれた私はトラック上をコロコロと転がされて、いつしか失神してしまいました。何十キロも走り続けたと思いますが、頬を叩かれて我に戻りました。暗くなった頃、病院の大きな門を通って、五階建ての病院に到着して路上に降りましたが、介添者はいなく、どのようなにして歩いたのか記憶はなく、放心状態だったのです。陸軍病院でした。ここなれば医師も薬もあ

また騙されたか、何度もあきらめと落胆が続きました。

最後の嘘は昭和二十二年七月上旬です。夕刻に作業から帰ると、明後日に「日本へ帰れる」と指令が出ました。今度は本当の話だと、皆が一樣に作業の疲れもフツ飛ばす勢いで手を取り合って「良かった」「良かった」これで命を持って日本へ帰れるぞ、と喜び騒ぎました。

八百人近く二年前の約半分に減少が十両の貨物列車に乗り込み、東へ、東へと列車は七日間を走り続けて、日本からの引揚船が入港するナホトカ港の近くに到着して、貨車から降りると引揚者収容所とは反対の方向へ誘導させられました。「これは何事なのか?」「なぜ収容所へ行かのか」と次第に騒ぎは大きくなってきたために、ソ連兵が銃を構えて近寄って来た。「詳細な説明をせよ」と強く要請をしました。その返答は、ここから数キロ離れた収容所の日本人が病弱者の続出で、作業が出来ない状態なので「我々と交替をさ

せる」とのソ連側の指令で、直ちに「身体検査を実施する」との話を切り出してきました。その検査方法も全く野蛮な方法で、ソ連の軍医は、一人一人の尻の肉を指で摘んで、少しでも肉が有れば、「合格だ」との判定で納得が出来ない検査でした。病弱が著しい者だけ二十数人は帰国となり、八百五十人近くは逆戻りして収容所へ入りました。今までも何度となく「日本へ帰れる」とのデマが出されていましたが、今度こそは帰国が出来ると大きく期待していただけに、までも裏切られた事に言い表すことのできない口惜しい思いで、ソ連側の不誠意な仕打ちに全員が涙を流して泣き叫びました。三日ごとに日本からの引揚船が入港する度に千人ずつが船に乗り込み帰国して行く姿を見送りながらの作業が続きました。私自身も、三年目の冬は到底乗り越える事は出来ない。身体も二十キロ近く痩せて夜盲症と急性肺炎の併発もあり、この命は半年は持たないと思い、是非年内中に帰国出来る方法を考えました。

ながら、甲板上に並んだ幾つもの集団から「万歳」「万歳」の繰り返しが続きました。

〔電車の中で親子が対面〕

舞鶴援護局で、引揚者には一人三百円（百円札三枚）を渡された時は飛び上がるほど喜びました。なぜならば、六年前の昭和十六年当時、私が志願兵で出征する頃、兄の月給は三十七円だったことを記憶していましたので、今三百円を手に入れたことで、一年近くは充分に暮せると思いました。

十一月三日援護局を出発して各人が故郷をめざして、東舞鶴駅を午前十時頃に出て、昼過ぎ頃に京都駅に到着した時に、車内販売でタバコを一箱（ピース十本入り）をかうと「五十円です」の声に驚いて、「十本入り一箱でよいから」と言いますと、「ハイそうですよ」との返事でした。物価は六年の間にどうなっているのか？……と不審に思いました。その外に、抑留中に幾度となく夢にも見たあん卷、まんじゅう等はさつまいもの代用食でしたが、皆が夢中になり、我先にと買いあさりまし

（※ナホトカ港は十二月になると海が凍るために船は入港できない、春までは凍結です。）

当時、私が責任者となり、八十七人の集団で高い丘を削って、その場所に三階建ての宿舎（ブロック積み）の建設に着工していましたので、集団員と相談の結果、ソ連収容所長に対して「九十日以内に完工出来たら日本へ帰国ができる」事を条件にした契約書を通訳を通じて作成して、ソ連側管理局へ提出しました。これに力を得た一同は夕方暗くなっても休もうとせず、月の明りを頼りに作業を続けて、「完工」を合言葉に何よりの願いとして、最後の力を振り絞ってちょうど九十日目に見事に完成しました。出来上りぶりを収容所長も現場を確認して、私に握手を求めて、全員が並ぶ前で「十月三十日帰国せよ」。直ちに管理局へ手続をとることを確約して指令を発しました。

十月三十日朝、引揚船の第一大拓丸に全員が乗船して、三日後の十一月一日朝、青い山々の舞鶴港に入港して、紅葉に彩られた丹波の山々を眺め

た。二年余り食べ物に飢えに飢えていた私達は、品切れになるまで買いました。残った金はずかでしたが、復員者には家に着くまでの運賃は切符が渡されていました。

懐かしい故郷の四日市には夕方暗くなって到着しました。夢に幾度も描いた故郷の土を踏みしめて、感激にむせ返りながら、シベリアの地で亡くなった幾多の戦友達の姿が脳裏に浮びました。十一月三日は復興祭で賑やかでした。昭和二十年六月の空襲で四日市市内のほとんどが焼野原になった町にも追い追いと家が建ち並んで、復興して活気が出て来た事を祝う祭で、あなたあなたに提灯が並び、明るい夜景で多くの人が楽しんでおりましたが、その光景には見とれずに我が家へと向いました。

しかし六年前に建ち並んでいた家並みは無くなり、空地の出来たあなたあなたとぼつんぼつんと家がありました。暗がりの中を家の表札をそれぞれ見ながら、川と橋の位置を頼りに実家を探しま

したが見当らず、知人の家も無くなり、途方にくれていました。道行く人からは不審者に思われてジロジロ見られて困ってしまいました。時にフツと良い考えが浮びました。郵便局で尋ねることにした。郵便局は歩いて十五分の所にありました。郵便局には電報配達のための年配の人に住居を尋ねると、厚い帳簿を調べて親切に紙に書いて教えられました。「三重交通の諏訪駅から電車に乗り、四つ目の泊駅で降りて山の方向へ約三百メートル歩くと、左へ曲る広い道路へ出て、六番目の道を右へ曲る」と教えられて、諏訪駅から満員の電車で、デツキに乗りました。が不安はつるばかりでしたが、親切な郵便局員さんのメモをしっかり握って、一つ目の駅が過ぎて二つ目の日永駅に着きました。単線のためここで上りと下りの電車がすれ違うので上り電車が到着しました。その電車も満員で、窓側に立っている人が父によく似ていることと、兄らしい人が横に並んでいることに気付いて、思わず「お父さん」「お父さん」と

域の中には貴重な経験・体験を持った方、または優れた技能・技術を持った方がおられると思う。こうした方々を中心に話を聞いて地域のコミュニケーションの向上に役立てたいということから、自治会を単位とした「雑学講座」の開設が提唱されました。

廣田氏は当時自治会長の職にあつて、積極的にこの運動に参加して、自らは「シベリア抑留の体験」を話しておられた。

こうした事を耳にしたので、早速廣田氏に電話をして抑留者協会への加入を要請し、このたび手記をお願いすることになった。廣田氏には本年度から抑留者協会三重県支部の役員として活躍をお願いしている。

(三重県 森 勇生)

叫びました。その声に答えるように「吉生だ」「吉生だ」と呼びながら下り電車の私の方へホームを走り寄って来ました。「電車は出さな!!」「発車させるな!!」と乗客の人々が叫びました。父と兄が乗り込んで、二人がしっかりと抱き寄りました。夢ではないかと感激するうちに発車した電車内では「良かった」「父子が対面出来た」の声援と笑顔で拍手が湧き上がり、「万歳」「万歳」が一斉に行われました。不思議な対面劇で感激は増すばかりでした。兄は当日、会社から帰り新聞紙上のシベリア復員者の名前を見て「吉生が帰って来る」、焼跡へ行き困っているだろうと思い、鈴鹿市から駆けつけて父と連れ立って迎えに出るつもりで電車に乗って来たのです。この対面劇は有名になり、その後も私が電車に乗る度に、「父子が電車の中で対面された人ですね」と話しかけられました。

#### 【執筆者の紹介】

平成九年、久居市教育委員会の呼びかけで、地

#### シベリア抑留記

滋賀県 山中 重夫

#### 終戦を迎えて

昭和二十(一九四五)年八月十五日、通化の街は快晴で暑い日であった。この日は休日で、朝から洗濯を手早く済ませ、身の整理をして昼前に戦友と外出をした。町外れの農家で休息をしていると同部隊の兵隊が急ぎ足で帰ってくる。まだ昼を少し回った頃で帰るには早い気がしたので隊員の一人を呼び止めてなぜそんなに急ぎ足で帰るのかを尋ねた。するとその兵は「日本は戦争に負けたらしい、天皇陛下の放送があつたそうだ」と言った。私達は驚いて市内へ行くのを止めて直ぐに帰隊した。部隊に帰ると将校が一人日本刀を抜いて暴れている。我々はしばらくその様子を見ていたが係わり合いを恐れてすぐ隊舎に戻り戦友達と今後我々はどうすればよいのか案じていた。もとより